



〈新学期をひかえて 豊かな心と丈夫な体〉

子供の自主性を大切に

＝ 過保護と過干渉の戒め ＝

新学期が近づきました。新しく入園、入学するお子さんをお持ちのご家庭では、喜びに満ちた期待感でいっぱいのことと思います。

今年は、国際児童年です。豊かな心と丈夫な体をもつた子供に育つてほしいというのが、私たち親の切なる願いです。新学期をひかえて、子供のしつけと体力づくりにスポットを当ててみました。

しつけとは、子供の自主性を重んじながら、日常生活に必要な行動様式を習慣づけること、と頭ではわかっていても実際は、わが子かわいさのあまり甘やかしすぎる

“自己中心”になりがち

過保護のしつけ

過保護になってはいけなと思いつつも、つい世話をやきすぎてしまうのも、親ならばこそ心理といえましょう。

しかし、何ごとも「過ぎたるはおよばざるがごとし」で、過保護も、子供の成育によい結果をもたらさない場合が多いようです。一般的に過保護とは、子供のいいなりになったり、子供が自分でしなければならぬことまで親がやってしまう、一方的なサービス過剰の親子関係をいいます。

このような過保護のしつけは、子供の性格形成にどういう影響を与えるかといえますと、まず「子供のいいなり」になっていると、子供は自己中心的で自分勝手な行動をとることが多くなり、学校などの集団生活に必要な協調性を欠くようになりがちです。また、「世話のやきすぎ」は、子供が自分で考え、行動する自主的な生活経験のチャンスを少なくさせるこ

過保護になったり、逆に親の理想とする子供像に近づけようとして厳しすぎる統制、いわゆる過干渉になったりしがちです。

過保護と過干渉、この二つのし

この結果、社会生活にスムーズに適應できなかったり、自分では責任をもとうとしない依頼心の強い性格になりがちです。しつけは子供自身、自らの意欲から行われて行動するようにしむけてこそ、自主性が育ちます。まず、子供の身になって考えることが、上手なしつけのコツです。

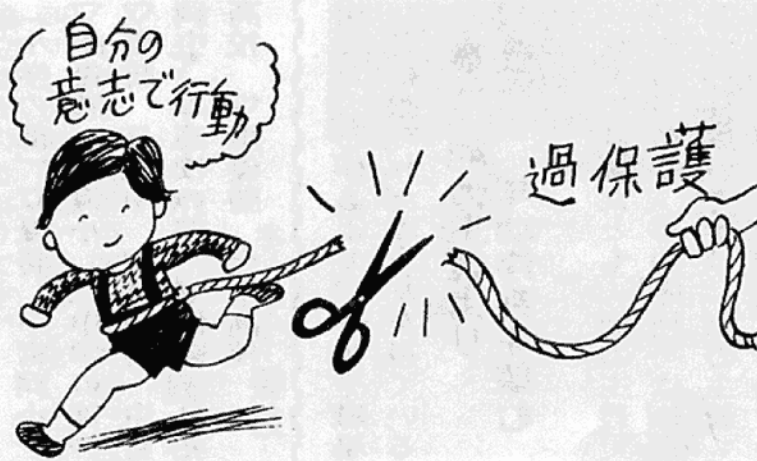
二面性をもった性格も

過干渉のしつけ

しつけを「習慣づけ」と考えると、ある面では、半ば強制的にならざるをえないことがあるのも確かです。ことに幼児期には、厳格なしつけや干渉は、子供の人間形成にとって極めて重要な意味をもっています。ただ、問題はその度合いです。厳しすぎる強制過干渉は、過保護と同じように、子供の

性格形成にいい影響を与えない場合が多いようです。過干渉の場合、親の理想とする子供像に近づけるため、「こうしなさい」「やめなさい」「いけません」といったような命令・禁止・拒否のことがばや態度が、しつけの中心になりがちです。子供は、親のいう通りにしない

つけに共通していることは、子供の「自主性」を育てる上でほとんど役立っていないことです。甘やかすのも厳しくするのも、ほどほどにしましょう。



歳時記

啓蟄

テレビの朝のショー番組で、アナウンサーが「今日は啓蟄。穴ごもりしていた虫がはい出して来る季節です。いよいよ春です」といったら、聞いていた子供が「ほんとだね。さっき流しのところにゴキブリが顔出してたよ」といったとか。

最近の生活は暖房がいきわたりに、ゴキブリなどが家の中で越冬するようになって、季節感がうすれてしまいました。

啓蟄は、年を二十四の節氣にわけて季節をあらわすもののひとつで、冬眠していた虫やへびが穴から出て来る時期。毎年三月六日ごろがこの日にあたり、今年も三月六日です。

このころは、所によってはまだ真冬ですが、雪のないところでは、たしかに虫などが動きはじめます。

それにしても、啓蟄の文字はむずかしいですね。蟄は虫が土中にこもること。徳川時代の武士の刑罰に、蟄居（ちぢこも）りというのがあったのをご存じでしょう。これは虫の冬眠みたいに家の中で謹慎していることです。啓はひらくで、穴をひらいて出て来るということです。